

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-8

横田は朝倉から、次回作を形に前借りをしていた。号数にもよるが、何作描けば完済になるのか、懸念を抱くほどの金額だった。

ここで、生き様が横田と対照的な画家だった田中一村について記しておくことにする。

1977年（昭和52年）秋、69歳で没した日本画家の田中一村は、（昭和元年）東京美術学校（現・東京芸術大学）日本画科に入学。同期に東山魁夷がいる。

美術学校や専攻も、創作本書に登場する横田の先輩にあたることも、田中一村を記載した大まかな理由の一端である。

東京美術学校をわずか2カ月余りで中退して12年後、千葉県千葉寺町に移住。それまで描いてきた南画をやめて、独自の画風を拓こうと日展や院展に野心作を出品するが落選し続ける。

画家には医師などの支援者もいたが、中央画壇へ失望した一村は、以前から奄美大島の自然に魅かれていたこともあって、移住を決意する。

その後、没するまでの20年にも及ぶ奄美大島での画家活動は、紬工場で5年間、染色工として働き、貯えた賃金で3年間の絵画制作に傾注するという清貧生活のサイクルの中で行われた。

没後七年経って、NHK（日曜美術館）での放映や南日本新聞に連載された特集記事などにより、画家の独特なタッチと色彩感覚が日の目を見ることとなる。

代表作として、奄美時代に描かれた『アダンの海辺』や『不喰芋と蘇鐵』などが挙げられる。

清貧で孤高な生涯を送った一村が逝去した年に生まれ、奇しくも同じ学び舎から画業の道に入ることになった横田の境遇は、一村と比すると、パトロンにしても関わってきた女たちに限っても、その差異は明らかである。

二人の画才が遜色なかったとしても、横田には腕利き目利きの辣腕家のパトロンで存在価値が大きい朝倉が背後に控えている。

「どのような弱みを握られているのかしら……？お会いするのが楽しみですわ」

真紀はジン・トニックのお変わりを持ってきたバースタッフが食べ終えた食器を片づけるのを待って、色気漂う口角のあがった笑みを浮かべて言った。